

新年度の初めにあって教職員総会挨拶

2017年4月3日月曜日
京都造形芸術大学学長 尾池和夫

2017年度の初めにあって、近未来へ向かっての私の視点をお話したいと思っています。

京都造形芸術大学通学部で学位を得た方は、現在までに、博士39名、修士951名、学士10483名になりました。京都造形芸術大学通信教育部で修士の学位を得られた方は現在までに610名、学士の学位を得られた方は、現在までに6269名になりました。

京都芸術短期大学を卒業された方は11,733名、京都芸術デザイン専門学校の卒業生は3171名、京都文化日本語学校の卒業生は、75か国からの5,127名、合計すると、36783名となります。

姉妹関係にある東北芸術工科大学でも、今年の3月には博士（芸術工学）の学位1名、修士の学位授与35名、学士494名が誕生して、いよいよ学士9233名、修士888名、博士8名の、1万人を超える出身者のいる大学になりました。

これだけの出身者のいる大学にとって、同窓会を確立することが何よりも大切です。10年後20年後さらに50年後の学園を支えるのはこの同窓生のネットワークです。ことしも昨年の経験を活かしながら、秋のホームカミングデーを中心にさまざまな企画が考えられており、教職員の皆さんのご協力を必要としています。

以前も話しましたが、卒業生が帰りたくなる学園にするにはどうすればよいかということをご自分で考えていなければなりません。理事長もよく言われますが、本当に困ったときにはこの学園に帰って来るようにと、私も言ったことがあります。しかし、ある卒業生は私に、困っているときは大学に顔を出せないと言いました。錦を飾らなくても帰れる大学であってほしいというのです。また、ホームカミングデーは早く日程を決めてくれないと仕事のやりくりができないという会社経営の卒業生もいました。キーワードで検索してくれないと情報にたどり着けないのが、今のこの学園のシステムですが、それだけではだめで、どうすれば全員に情報を届けることができるかを、教職員総会の課題にして教職員全員で考えるべきだという意見ももらいました。

瓜生山学園として中期計画を公表することになりましたが、京都造形芸術大学の中では、通学部と通信教育部との連携を強め、相互の学部と大学院の連携を意識した運営をしたいと思っています。私自身も今年は、通学部の講義だけでなく、大学院での講義、通信教育部でのスクーリングを担当して、それらを体験しながら運営のあり方を考える所存です。

今年の卒業制作展は、通学部、通信教育部、専門学校と、かなりの日時をかけて見せていただきました。その全体を通しての感想の中で、何より重要なのは、人に見せる作品を産み出すということであり、芸術作品やデザインの、知財としての権利を確保することだと思いました。

まず権利を守るということですが、卒業作品の中には、すぐにでも商品化できる完成度の高いものもありました。私も木の椅子を学長室に買いました。それらのどれもが知財の登録を考えていないということがたいへん気になり、学科長にも学習の過程に知的財産の制度の学習と権利を確保する申請を実践することをお願いしました。

もう一つは、絵画などの作品の撮影を全面的に禁止する分野があり、それに関しても現場で議論しました。芸術作品は少しでも多くの人に見てもらえることが重要であり、写真を撮って大いに宣伝してほしいと思うのが私の基本的な考え方です。せひ作品はできるだけ幅広い手段で公開するように学生にも指導していただきたいと思っています。

学生たちには私はさまざまな分野での基本的なことを知っておいてほしいと思っています。そしてこれからの生涯にわたって、学習を繰り返すための基礎を大学で身につけ、また通信教育では年代や立場を問わず、あらゆる人に、学習の機会を得てもらえるようにしたいと思っています。

基本的なことという例を挙げてみたいと思います。私の分担する講義の「自然と芸術」では、自然の理解を深めることを目標とします。例えば人類が芸術作品を見るのは太陽の光の反射による場合が多いのですが、その太陽の光とはどのような光りであるかということを理解してもらうために、世界の最先端の太陽望遠鏡のデータを用いて太陽光スペクトルの詳細を見てもらいます。現在普通に使われる液晶画面で見る作品は、透過光によるものですが、人類はその誕生以来、反射光で育ってきたものであり、その違いを認識しておくことが重要です。

また、人間とは何かを考えるためには、文明哲学研究所の松沢哲郎所長と齋藤亜矢さんが進化の最新の知識を紹介します。4つの足で歩く動物が後ろ足で立つようになって人類の2足歩行が始まったのではなく、4つの手のうちの2つが足になったのだということから、重力場での2足歩行をする人類の基本を理解することが重要です。そのことが介護ロボットのデザインの基本になります。京都造形芸術大学はデザインを育てる人を育てる大学と言われますが、デザインには最新の科学の知識を学ぶことが重要です。

さらに、学生に教えていることは、教職員も実行するという心を心がけてほしいとおもいます。例えば、学生に渡してある創造学習センター編「ことばと表現Ⅰ」という冊子があります。その12ページには、段落をあらためて改行したら1字下げようという説明がありますが、実際にこの学園内に出回っている文書には、それを守ったものが極めて少ないと思います。日本語作文の基本が守られていないということです。先日、そのことをお話ししたら、最終段階の中期計画の文書がみごとに修正されており、このような素早い仕事ができる事務局であると学園の将来は明るいと思いました。

このように、この大学にいて日頃考えている、さまざまな視点を話しましたが、何はともあれ、心身のご健康に十分留意され、学生との対話を中心として学習を支援し、感動する作品を産みだす環境を整え、学生一人ひとりの進路を見すえた学習指導をしっかりと行っていただきたいと願っています。今年度はとくに年度末の行事が目白押しで忙しくなると思われませんが、今年度も、どうかよろしくお願いします。

ありがとうございました。